

# 福祉国家をめざして

中宮祠中三年 小金山 貴弘

僕の家は、食堂とみやげ物屋をやっている。食堂には、一般と団体の予約のお客さんがあります。五月から六月にかけては、特に修学旅行の団体が多くなります。僕たちと同じ中学三年生の連中が、ほとんど毎日やってきます。その修学旅行の学生の中に、ときどき、「〇〇ろろ学校」とか「△△養護学校」とか、身体障害者の入達の旅行の予約が入ってきます。父は、そういう入達の予約があると、他の予約の人達よりも優先的に席をとったりし、母もまた、献立やうつわに気を使ったりしている様です。ですから、そういう学校が一度うちへ来ると、先生方が、来年も来ようと、毎年来て下さる様になります。そのため、年々障害者の学校が増えてきているようです。

僕は、学校へ行っているの、出会う機会がないのですが、今年は、たまたま日曜日に修学旅行の予約がいくつか重なりました。一般のお客さんも多い日曜日とあって、他の店で断られたという身障者の学校が二校、普通の学校が二校とはりました。一つは、山梨県の盲学校で、僕は、「目が見えないのに、来たって面白いのかな」と思いましたが、父や母が真険に打ち合わせしている姿を見て、こんなこと言ったらしかられると思ひ、だまっていた。もう一つの学校は、埼玉県の先天性の小児マヒの人達で、一人ずつ車イスに乗り、保護者がついて来るそうです。

「テーブルの間かくをあけて、保護者のいすだけ用意だな。余分ないすは車いすのじやまになるから、今晚のうちに、二階へ運んでおこう。」

と、父の指示がありました。(やれやれ、また手伝われそうぞ。さっさと勉強部屋へ逃

げようつと……)と思つて、立とうとしたとたん、母に気付かれてしまいました。かねんしてす運びの手伝いをしながらも、「中間テストの準備があるのにな……。」と、ブツブツ文句を言っていると、「いすを運べる身体を持ったんだ。感謝しろ。」

と、父に言われてしまいました。さて、次の日曜日、あいにくの雨で、どこかの学校も予定より早く昼食をとることになつたらしく、盲学校以外は、みんな同時についてしまいました。食時を終った学生が、いつせいに売店に降りて来て、買い物をしていきます。何人いても手が足りなくなるほど忙しくなるので、当然僕も手伝いに出されます。包装紙と品物とお金でこつたがえしています。ふと母の方を見た時、母は低い位置から、人形のしおりか何かを手渡されてました。(あれっ)と思つて、手の出た方を見ると、この混雑の中、車いすの男の子が買った物をさし出しているところでした。首が、自分の意思に反してガクガクとゆれてかたむく、やつと品物をつかんだ指も、変なふうになつていました。僕は、突然ゾクッと寒けを感じました。でも母は、

「別々に包みましょうか。」と冷静に対応しているのを見て驚きました。ところが、男の子の後にいた母親みたいな人が、

「特別扱いしないで下さい。友達だから別々にしてもらいましょね。サトル君」と、いたわっている様子もなく平然と答えました。そのときにはなんだか冷たい人だなと感じました。

その夜、昼間の車イスの親子を思いだしました。

(ここへ修学旅行に来られるのだから、まだ軽い小児マヒだったのかな。学校にはもつと重い人達が、旅行にも行けず残されているのかな。あの人は、お母さんが死んでしまつたらどうするのか……)頭の中を、複雑な思いがかけめぐっていきました。当り前に生活できることが、こんなにも有りがたいと今までに思ったことがありませんでした。受験の苦しみなんて、苦しみの中にいらないと思いました。勉強したくても、身体が自由がきかず、食べる事さえも一人でできない人が、たくさんいるはず。それでも、親は子供

の人格を尊重して、「特別扱いしないで下さい。」と胸を張つて言います。僕は、彼らと接する時、あわれみや同情など何の役にも立たない

という事を知りました。身障者の人にとってみると、普通の人と同じく接してもらおう事が、最大の励みになるのではないのでしょうか。でも、親や兄弟が死んでしまつた後、いったい誰が彼らの面倒を見るのだろうか。と考えると、いても立ってもいられない気持ちになってきます。でも、はつきりしていることは、あの入達の老後が、何一つ心配のないような社会を築く様に、また、多くの身障者の人達に、不安を感じさせない社会を作っていく様に、僕は努力しなくては

いけないということ。そのために、僕は、一生懸命勉強して、身障者の入達の願いに耳を傾け、しなければならぬことをすぐ実行できる立場に立ちたいと思います。安心して人生を送れる福祉国家をめざして……。

## 広がる善意の輪

カーネーションの材料2,000枚集まる



身体障害者授産施設の建設資金に役立てようと、愛のカーネーション作りを励む「日光市中心身障

害者父母の会(小林芳樹会長)に、カーネーションの材料になるふろしきが、市内の小中学校や一般の方から続々と寄せられ、会員たちはうれしい悲鳴をあげています。各小中学校の児童会、生徒会は、心身障害者父母の会がカーネーションの材料にするふろしき(結婚式の引出物を包む化粧地のふろしき)を探しているというのを、先生から聞いたり、新聞を見て知り「わたしたちもお仕事の手伝いをしよう」と、集めたもので、その数は二千枚を越えました。このほか、市民の方からも市福祉事務所や新井正子さん(父母の会代表)方にも届けらるるなど、善意の輪は大きく広がっています。